

日本学術会議 幹事会附置委員会
フューチャー・アースの推進に関する委員会（第 23 期第 7 回）
議事要旨

1. 日 時：平成 27 年 12 月 9 日（水）16:00～18:00

2. 場 所：日本学術会議 2 階 大会議室

3. 出席状況

出席者：安成委員長、杉原副委員長、江守幹事、蟹江幹事（V-CUBE）、西條委員（V-CUBE）、巖佐委員（V-CUBE）、武内委員、花木委員、沖委員、春日委員、小池委員、三枝委員（V-CUBE）、中島委員、安岡委員、大手委員、谷口委員（V-CUBE）、村山委員（17 名）

欠席者：青木委員、遠藤委員、向井委員、大西委員、中村委員、氷見山委員、植田委員、小林委員、中静委員、春山委員、毛利委員、山形委員、山本委員、植松委員、河野委員、福士委員（16 名）

オブザーバー：科学技術振興機構廣田調査役・佐藤氏、文部科学省研究開発局樋口推進官、高木技術参与

事務局：千葉次長、石井参事官、鈴木参事官、松宮補佐、坂本補佐、樋田専門職、大橋専門職付、鈴木専門職付

4. 配布資料：

資料 1：フューチャー・アースの推進に関する委員会（第 23 期第 6 回）議事要旨（案）

資料 2：提言（案）

資料 3：Future Earth に関する地球研内での対応と国内外の進捗状況について

参考 1：委員名簿

5. 議 事：

（1）前回議事要旨（案）の確認

資料 1 に基づいて、前回議事要旨（案）が確認され、了承された。

（2）提言についての審議

資料 2：提言（案）について審議を行った。要旨の修正、言葉の定義、中立性、表現の適格性、今後の方向性の記述、第 2 章の構成等について議論が行われた。今後、修正部分（要旨、第 2 章の見直し（図の削除、文章の削減を含む）、すでに委員より意見が提出されているが現在は反映されていない箇所、今回の議論を踏まえた修正等）についてメールベースでのやりとりを行うこととし、修正については委員長・副委員長に一任することが承認された。

委員会における主な意見等は次のとおり。

【要旨の修正】

要旨については、現在前のバージョンとなっているが、本文に合わせて修正する。

【言葉の訳・定義・文言】

- ・Transdisciplinary の訳である「超学際的」の「超」という言葉は軽いのではないか。
- 当初は「超学的」としていた。学際をさらに高めるということで「超学際的」と言うようになった。
- 昨年、報告「環境学の俯瞰」（平成 26 年 9 月 26 日）を作成した際、「超学際的」は日本語としておかしいのではないかという指摘を受け、「トランスディシプリナリ」とカタカナにし、冒頭で定義を明確にした。
- 言葉についてはできるだけ訳したほうが良いと思う。「超学際」はこのままで良いのではないかと思う。
- これから定着させるために使うのは良いと思うが、「超学際」の「超」はこういった意味であるという定義は書いた方がよい。

- ・「超学際」と「超学際的」があるので、統一した方が良い。
- ・「超学際」で、既に馴染んでいるが、「超学術研究」つまり学術だけではないというのが本当のところだと思う。本文に「社会を変えたいという強い意志」とあるが、Future Earth (FE) として、まずは学術のあり方を変えようという意思があり、そのため社会と協働したい、というスタンスがあると良いのではないかと思います。
- ・Anthropocene をどう訳すか（人類世なのか、人新世か）もはっきりとした方が良いのではないかと。
- ・文言でいうと、「提言する」という文言が提言でない部分に出てくるのが気になる。

【中立性】

- ・科学の中立性を提言内で担保することが必要だと思う。
 - ・社会をどうすると良いということまで提言すべきという論もあるが、かたや科学は中立であるべきとの考えもある。このような議論があることを明示し、どうあるべきかは科学と社会の在り方で決めるべきとするのが良いのではないかと。
- さまざまな価値があることを認識した上で、社会の多様な価値と付き合っていくということが発言されなければならないのではないかと思います。
- 問題の設定をどうするのか、問題の解決のための研究の企画をどうするのかについても、ステークホルダーと協働で行っていくということになれば、どのような地球規模の問題をどう解決するかに価値が入ってくる。そしてこれを解決するための科学自体は健全でなければならない。そこに中立性という問題が発生してくる。このように段階を追って説明すると、明確になるのではないかと。また、追加の文章としてご提案いただくと良いのではないかと。
- 価値はすべてにある。ただし、不都合な真実を報告しないような状況を作る、ある方向の研究をさせない、というのはいけないと思う。そのような方向で書きたい。
- この提言についてはだいぶ完成度が上がってきているところなので、追加の方法等については考えさせていただきたい。

【表現の適格性・関与委員会】

- ・「社会を変えたいという強い意志」とあるが、提言のⅠ、Ⅱで社会は変わるのか。
Ⅰは学術の話、Ⅱはステークホルダーとの話。「社会を変える」は少し強いのでは。基本的には「持続可能な地球社会の実現を目指して」というスタンス。そのように書くと良いのでは。
- 「社会を変えたいという強い意志の共有のもとに」を「持続可能な地球社会の実現を目指して」とすると、トランスフォーメーションの要素がなくなるのではないかと。
- この部分は思い入れが強い。パトスを残しつつ誤解されないようにしたい。
- ・「（３）今後の方向性について」部分について、読み方によっては、基礎研究を行う人々が、社会のある勢力の言うことを聞かなければならないという印象を与えかねない懸念がある。また、日本版関与委員会部分について、コメントが「会議体を増やすよりも、FE で取り組むべき具体的な課題の解決に注力すべきではないか」とついているが、これは会議体を増やすというよりは、関与の在り方を考えるグループを作らないといけないという意味である。
- 科学者だけでやってもいけないという意味で、関与委員会が必要。
- ・社会を変える・変えないではなく、制度そのものを変数として考えるのが社会科学的な考え方ではないかと思う。

【今後の方向性の記述】

- ・今後の方向性の記述について提案した。前回の案のままでは研究者コミュニティからの希望・意見でとどまってしまうため、オールジャパンとしての動きにつなげるため。
最初の提案は、提言の後に入れるものだった。その後、提言の中に一度入れたが、議論をしたものではないため現在の位置となった。コメントで「各省の役割が適切に記載されておらず、各省との調整もされていない」とあるが、だからこそ、この場所にあるということを理解してもらいたい。社会のステークホルダーと一緒に考えたいというメッセージを盛り込むため、書き込むことが必要だと思う。
- 基本的には、今回の提言は、FE の基本的考え方を示すもの。今後仕組みについて議論してい

なければならない。その頭出しとしても、今回提案した。

- ・場所としても、提言の前の段落と後の段落が呼応する形となるので、ここが良いと思う。

【第2章の構成等】

- ・第2章部分については、大部分が記録「Future Earth 持続可能な地球社会を目指して」（平成26年7月25日）の引用。引用であることはきちんと明記することに加え、引用は最大2・3ページ程度、できれば半ページ程度、とのコメントをいただいている。この点は修正しなければならない。
- ・気になる点として1ページめ「危機的状況」とは何が危機的なのか。その点も社会と考えるべきと入れると良いのではないか。「歴史的転換点」についても何が歴史的転換点かわからない。3ページの「限界に近づく地球環境」についても、これについて研究していくべきというメッセージを入れると良いのではないか。
- ・どんな社会が持続してほしいかについても議論すべき。そのあたりをきちんとしようという投げかけがあると良いと思う。
- ・第2章について、内容は残していかなければならないが、現在載っている図については、削除しても良いか。

→少なくとも図2と図3は削除して良いと思う。

→図1は、きちんとした説明なしではミスリーディング。

→第2章については、今のご意見も踏まえ修正予定。具体的な案をいただけるとありがたい。

【一般の方が読むにあたっての配慮】

- ・この提言については、多くの一般の方に新しい概念を伝える形にする必要があるのではないか。
- 一般の方が読むのであれば、先ほどの議論でなくす方向だった図はあった方がわかりやすいのではないか。
- そのためであれば、提言の中身をまとめた1枚紙を作って示した方が良いのではないか。
- 提言のすぐ前に「日本学術会議は、今後、社会においてより一層広い議論を巻き起こすために、一層の努力を払う。」と宣言している。ここで姿勢が示せていると思う。図については少なくとも2、3はいらないと思う。
- もし図1を残すなら、新しいバージョンにした方がよい。

【今後の手続について】

- ・大きな構成として、このような形で提言として出すということは了解で良いか。
今後修正点についてはメールでやりとりすることとし、修正について委員長・副委員長に一任することによってよろしいか。
 - ・コメントについては、具体的な形でいただきたい。
- 承認された。

（3）Future Earthの一連の国際会合／会議の報告

以下のとおり報告があった。

- ・11月にSC、ECの合同委員会、ガバニング・カウンスルの会合、その他公開イベントが数多く行われた。日本コンソーシアム・日本学術会議事務局に大変お世話になった。国際事務局としても、他の4ハブに大変お世話になった。事後になるが、コミュニケという短い文章でこの日本会議の概要がまとめられているので、本委員会の皆様にも後に事務局よりお送りする。
- ・第1回アジア地域顧問委員会会議が開催された。議長はNordin Hasan氏。アドバイザー的な役割としてスタートし、SCやECの要素も追加していけるようメンバーを追加していきたい。年に1度は開催し、次回は韓国で行う。
- ・この会議では、アジアでのSDGについても議論となった。
- ・11月14日（土）のサイエンスアゴラFuture Earthセッションの後、日本科学未来館とのコラボレーションについて議論をした
- ・16日～18日のSC、EC合同会議では、Knowledge-Action Network (KAN) をFuture Earthの活

動の中心に位置づけ、これを通してこれまでの IGBP 等の動きと新しい FE の動きを連携させ、具体的に進めていくことが議論された。

- ・ 20 日に SDG の KAN のワークショップが行われた。今後の計画等議論した。
- ・ KAN については、SDG、Urban、Disaster、Health の KAN について、日本人がそれぞれリエゾンとして関わっている。一昨日から明日まで Urban の KAN の在り方について議論するワークショップが開かれている。それぞれで新しい方向に進みだしている。
- ・ COP21 で、中国の NC がブースを出して、FE のアクティビディを照会している。

(4) その他

【国内の体制について】

- ・ EC で議論するにあたり、国内の役割を考えるグループが必要であること、国際的な EC でストラテジーが出た際、対応をするコアとなるグループが必要であることから、そのような体制を作ることが必要。暫定 EC 日本版をつくり、進めていく。メンバーシップの主体性・透明性が大切。
- ・ 1 月 21～22 日に、研究者・ステークホルダーで日本での研究課題を抽出するワークショップを行う。産業界・行政にもインタビュー等行っている。これらを受け、優先課題を議論いただく。研究者以外の声を拾っていく体制をつくっているところ。

■次回の開催等について

旅費が切迫している状況について、事務局より説明が行われ、それを踏まえ、可能であれば 2 月頃など年度内に 1 度行うこととし、難しい場合には、4 月以降に開催とすることとした。

以上